


わが国の水産業

いわし

 社団法人 日本水産資源保護協会 〒100 東京都千代田区永田町1-11-35 全国町村会館 TEL.03-593-2481

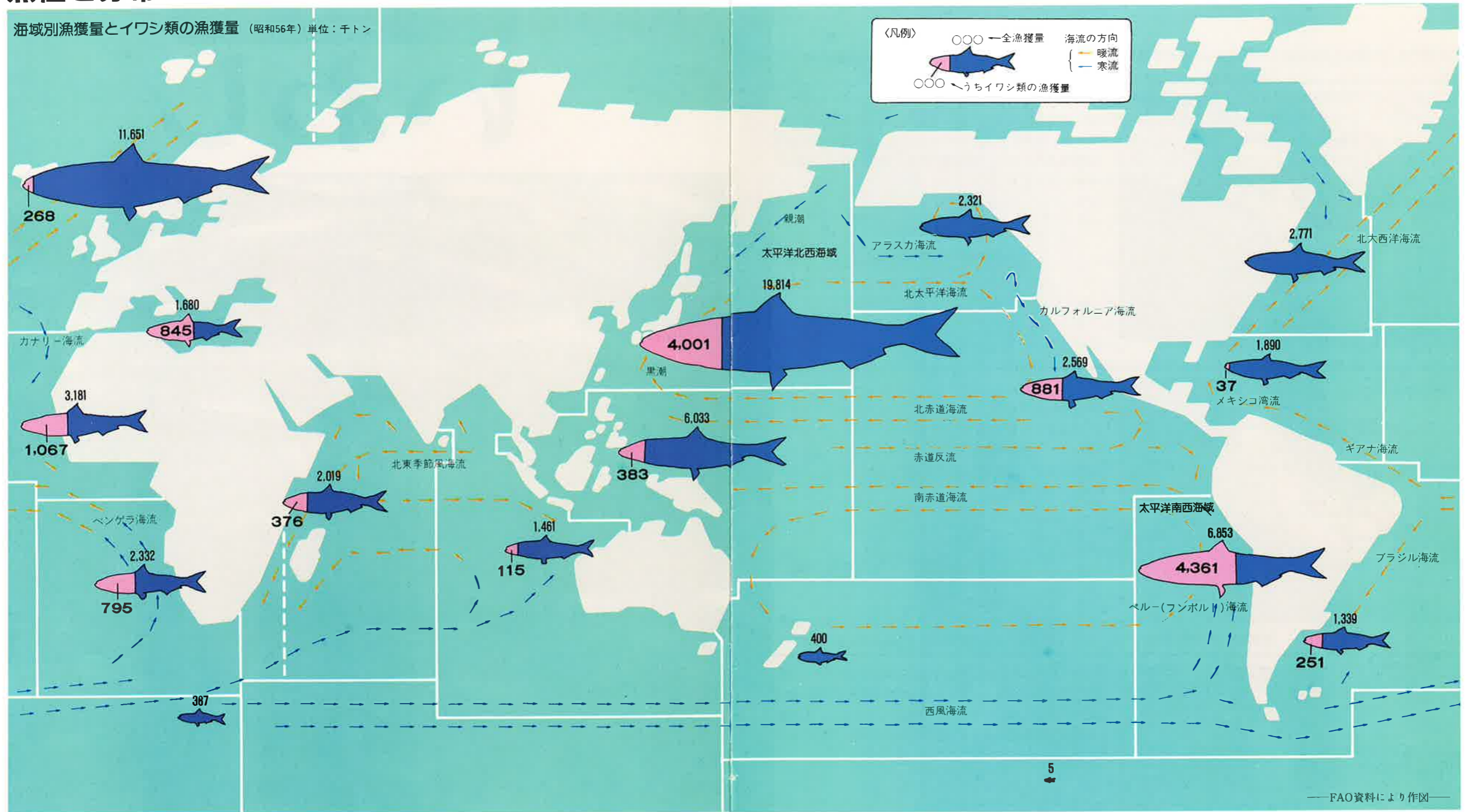


昭和59年3月

社団法人 日本水産資源保護協会

魚種と分布

海域別漁獲量とイワシ類の漁獲量 (昭和56年) 単位:千トン

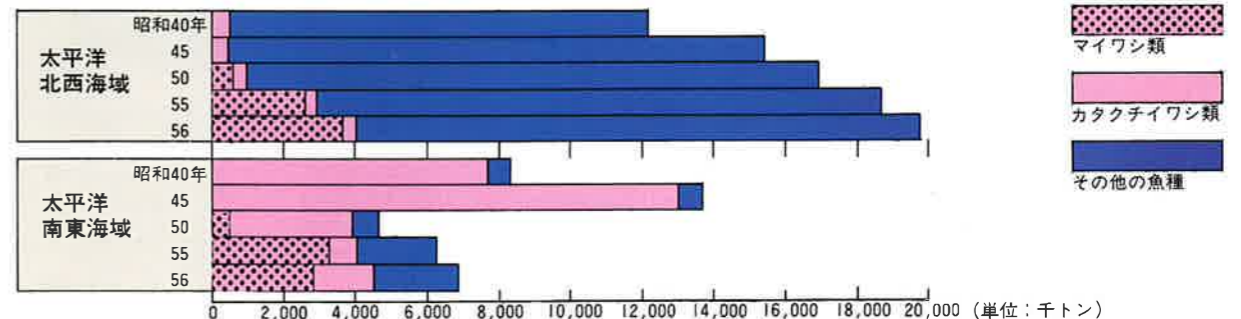


— FAO資料により作図 —

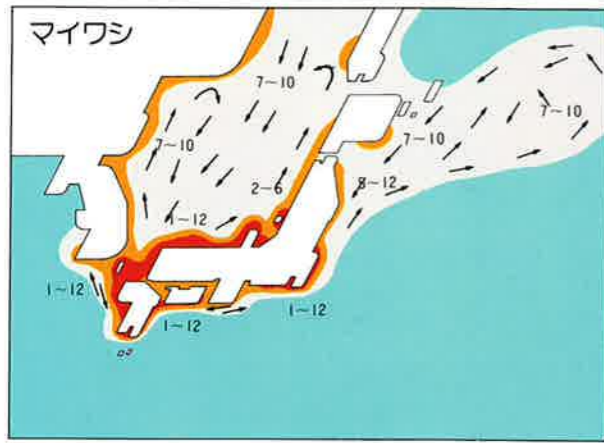
世界全体の海面漁業の漁獲量は、昭和56年で6,671万トンです。このうち暖水域を代表するイワシ類は、1,338万トン(20.1%)で、冷水域を代表するタラ類の1,060万トン(15.9%)を上まわり、世界でもっとも漁獲量の多い代表的な魚です。イワシ類は分類上、ニシン目に属し、イワシ科、カタクチイワシ科、およびウルメイワシ科などに分けられますが、このうち漁獲量の多いのはイワシ科のマイワシ属(789万トン)およびカタクチイワシ科のカタクチイワシ属(377万トン)で、ウルメイワシ科の漁獲量は

非常に少なく、6万トン程度です。

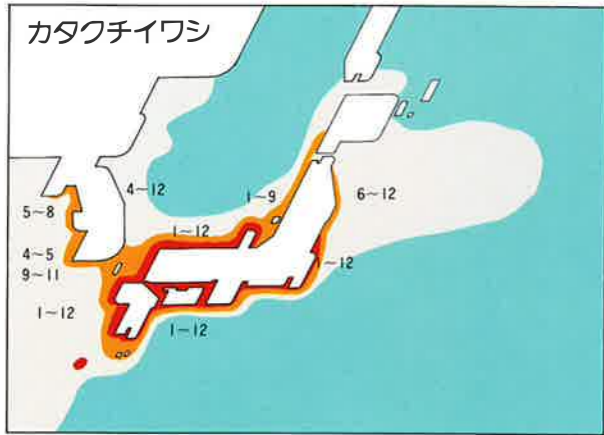
海域別の総漁獲量およびイワシ類の漁獲量は、上図のとおりです。このうち特にイワシ類の漁獲の多いのは、太平洋北西海域(日本・韓国周辺)および太平洋南東海域(ペルー・チリ沖)で、両海域の漁獲量を合わせると世界全体のイワシ類の50~80%を占めています。



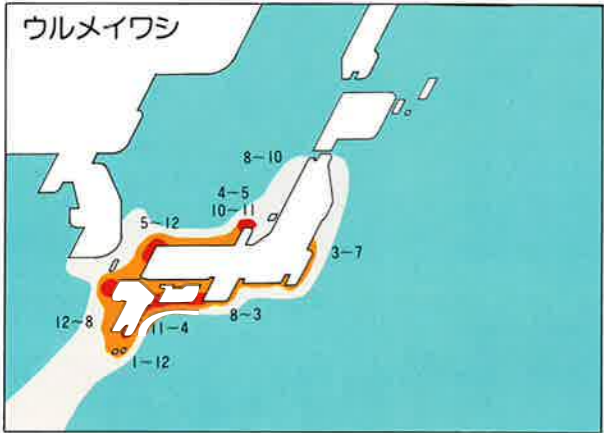
わが国のイワシ類の主なものは、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシの3種類です。



体側に1列又は2列の黒点があり、ナナツボシとも呼ばれ、また魚体の大小によって大羽、中羽、小羽ともいわれます。鮮魚のままあるいは塩干品、缶詰などの食品に利用されるほか、養魚用の餌料、養鶏や養豚の飼料の原料となります。



上顎は下顎より前に出ており、体色は上半が青く、下半は銀白色をしています。別名でタレクチイワシ、ヒコイワシなどとも呼ばれています。マイワシに比べて魚体は小さく、分布域はより沿岸性です。めざし、ごまめ、煮干しなどに加工されるほか、活魚はカツオ釣の餌として利用されます。

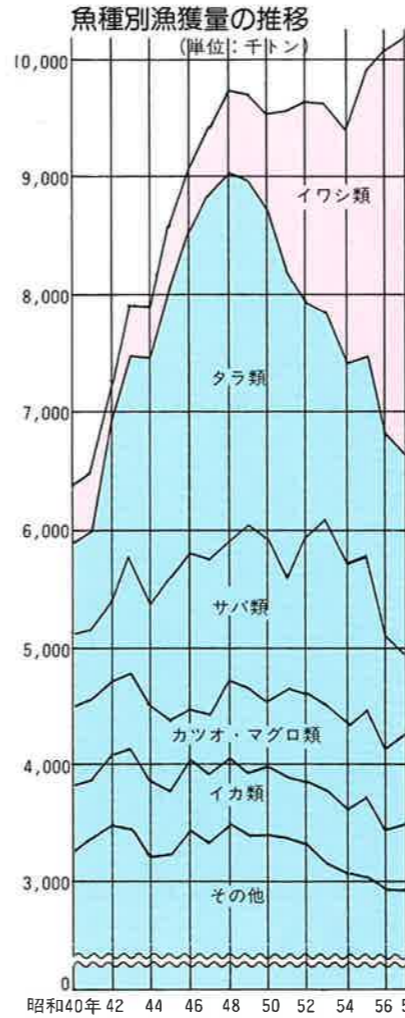


背びれの後端が腹びれより前方にあるのが特徴で、眼には厚い脂腺があります。体の上半は濃青色下半は、銀白色で、体の断面は円形に近い形をしています。一部は鮮魚として利用されますが、大部分は干物として利用されます。



分布域 漁場域 産卵場 回遊経路(数字は、月を表わす)

シラス：主にイワシ類の稚仔(孵化後1~2ヶ月のもの)のことをいいます。一般には煮て干したものが、しらす干しとして市場にでています。



わが国の海面漁業(養殖を除く)の漁獲量は、昭和57年で1,023万トンです。主要魚種の漁獲量の推移をみると、昭和40年代にわが国漁業の成長を支えてきたスケトウダラは、国際規制の強化、殊に昭和52年の米・ソの200海里漁業水域の設定のため著しく減少し、かわって昭和50年代はわが国の沿岸・沖合水域で漁獲されるマイワシの急増がこれを支えています。昭和57年の魚種構成はイワシ類35.1%、タラ類16.3%で、両者だけでわが国漁獲量の半分以上を占めています。次いでカツオ・マグロ類7.2%、サバ類7.0%、イカ類5.4%などが主なものです。

○マイワシ

マイワシは、資源変動の大きな魚種で、昭和11年には160万トンも獲れましたが、その後激減して昭和40年には9千トンまで落ち、幻の魚とまでいわれました。しかし、その後大幅に増加して昭和57年には329万トンと史上最高水準に達しています。主産地は東北・北海道の太平洋岸で8割程度、次いで山陰海域で1割程度、その他九州西部海域などです。

○カタクチイワシ

マイワシの不漁であった昭和30年代、40年代には30万トン以上も獲れましたが、近年では15万トン程度で推移しています。主産地は、瀬戸内海で4割程度、次いで九州西部海域が2割程度、その他遠州灘、豊後水道海域などです。

○ウルメイワシ

漁獲量に大きな変動はなく、3~5万トン程度です。主産地は九州西部海域の3~4割、山陰海域の3割で、このほか四国南西海域などがあります。



農林水産省「漁業養殖業生産統計年報」および中井(1960年)により作成